東京都オリンピック聖火ランナー　東海林克江さん

7 月 21 日（水）の点火セレモニーに参加した東海林さんは、アナウンサーとして活動し、2011 年に起こった東日本大震災の当日は放送局でニュースを読み、大きな揺れを感じながら電気、ガス、水道、電話などのライフライン情報を届けていました。そんな震災のひと月後に東海林さんを襲ったのが、「成人スティル病」という病です。40 度の高熱が続くなど一時期は起き上がることもできませんでしたが、2 年半という歳月をかけて病気を抑え込みほぼ自由に過ごせるようになりました。そんな日々を経て迎えた 2020 年でしたが、希望に満ちるはずだった年にコロナウイルスが襲い、聖火リレーは延期となってしまいました。1 年が経ち、形は変わってしまいましたが、それでも感動を分かち合うという大会にしたい、地域のみなさんと一緒に盛り上げたいという強い気持ちを持ちながら、ステージに上がりました。

以下、東海林さんの点火セレモニー参加後のコメントです。

「本当は公道を走りたかったので残念という気持ちはあるんですが、それでもこうして点火セレモニーに参加することができて、まずは火をつなぐことができてほっとした気持ちでいっぱいです。

（東日本大震災のあとに病気をなさったそうですが）ちょうど10年前に『成人スティル病』という病気になりました。40度の熱が下がらなくて、全身に蕁麻疹のようなものができ関節が痛くて、まったくベッドから起き上がることもできなくてこの先どうなってしまうんだろうという気持ちで、心も身体も落ち込んでいました。でも、薬と先生方のお力でなんとかここまで仕事もできて、今日聖火をつなぐという大役をこなすまでになりました。これは支えてくれた夫のおかげです。さらには仕事場のみんな、スタッフのみんなの応援があってのことだと思っています。難病になってもこういう風に元気になれるよということもみなさんに見ていただきたいと思いました。

（今日は炎にどのような想いを託したか？）私の手にくるまでの炎というのはいろんな方の想いが詰まってると思うんです。この想いが明後日の開会式で無事灯るということはとても素晴らしいと思っています。なので、この想いを大切にしていきたいと思います」